

基幹共同研究 1 非文字資料研究ネットワーク形成研究

ネットワーク形成と中国非物質文化遺産研究

大里 浩 秋
OSATO Hiroaki

非文字資料研究センターの基幹共同研究の1つである「ネットワーク形成研究」班の一員でありながら、活動らしきこともしないまま時間が過ぎてしまった。私がこの研究班で期待されたのは、中国で同種の研究をしている組織や個人とつながりを持つこと、あるいは彼らに関する情報を得ることだと理解していたが、個別共同研究の1つ「中国・韓国の旧日本租界」研究班（以下は租界班と略称）の活動は辛うじて維持したものの、非文字以外の雑用に振り回されて、とても基幹研究にまでは手が届かなかったのである。

しかし、COEを含めて非文字資料研究に8年参加することで、ネットワークについて少しではあるが経験を積むことができ、また、つい最近になって中国の「非物質文化遺産研究」に関する情報を得、かつ、これについての中間総括的な文章を読む機会があって、多少ながらその研究の実情を知ることができたので、以下にa ネットワーク形成で思うこと、b 中国非物質文化遺産研究について、と題して書いてみたい。

a ネットワーク形成で思うこと

COE 非文字研究への参加を求められた当初は、非文字で私ができる研究があるのかとの戸惑いがあった。急には動くエネルギーがわかなかったが、他の参加者の動向を見、自分が普段やってきたことを考えて、租界研究と結び付けて参加するしかない、そうでないと長続きしないと考えるに至り、それからは徐々に動けるようになった。このテーマでの参加を福田リーダー始め研究員各位に理解していただいたのは幸いであった。

そこで、その前から学内共同研究助成を得て進めていた、かつて日本租界が置かれていた中国のいくつかの都市を訪ねて現地の今の様子を戦前の日本人作成の地図を片手に眺めてみることに、現地の資料館で関連する資料を探すこと、そして現地で租界研究を手がけている研究者に会って話を聞くことを引き続いて行うことにした。この作業が一定の困難を伴うことは経験済みであった。日本が中国に租界を置いたのは日清戦争以後のことで、その勝利を背景に不平等な内容を押し付けたために中国側には最初から抵抗感があり、その後1945年の敗戦まで租界を基盤にして日本人がわが物顔に暮らしてきた経緯があることから、そうした歴史へのこだわりが現地の住民に残っているのは理解できるので、古地図を手にしてその辺をうろつくのは警戒されることになり、資料館で関連資料を探す際にも

見せてもらえないこともあったからである。そんな時は、現地に住む研究者の協力が不可欠であった。重慶でも漢口でも上海でもつてを探し、あるいはつてのつてを頼って研究者のお世話になったし、青島では適当な研究者を探せないまま、私が以前広州の学校で日本語を教えたことがあり、今は青島の郊外でレタスを栽培して日本に輸出している若い経営者が調査の先導役を引き受けてくれた。こうして各地で知り合った研究者や教え子のおかげで租界班の大事なネットワークを形成していき、現地調査が次第に淡々とこなせるようになり、また研究者間の情報交換もでき、やがてシンポジウムで共通の話題で報告し討論することができるようになった。さらには韓国での調査、研究者との交流も進んで現在に至っている。そして、この3年間で開いたシンポジウム（非文字資料研究センターでは公開研究会と呼ぶ）での中国・韓国の研究者との交流は、これからも実行していくべきものであり、それをどのような内容で維持し深めていくかが、私たちの研究班にとってのネットワーク形成の中身として問われているのである。

ネットワーク形成にはもう1つのやり方があり、非文字に関連した研究をやっている外国の研究機関につてを求めて協力・提携を呼びかけ、それらの機関と情報交換をして何を一緒に研究するか考えつつ実行に移すという手はあると思う。私はその方法で共同研究の相手を見つけることに反対ではないが、あまり時間を置かずに具体的な交流内容を作って相手に働きかけないと、協定を結んでも有名無実なものになる危険性がある。世界的研究の拠点を作るという歌い文句に惑わされず、1期目の蓄積の下で実行可能な交流、着実なネットワーク作りを2期目は目指すべきではないかと考えているところである。

b 中国非物質文化遺産研究について

中国にも非文字資料研究と同様の関心から研究する機関があると聞いていたし、そうした理由で中山大学を手始めにいくつかの大学の研究機関と交流協定を結んでいることは私も承知していたつもりだが、いつごろからどんな関心で中国での研究が始まり、今どんな状況にあるかはよくは知らないままできたのは、恥ずかしいことであった。

ところで、10年11月に中山大学非物質文化遺産研究中心から李莉微さんが派遣されて非文字資料研究センターの研究員として滞在し、私が指導教授を担当したことが縁で、彼女が帰国する際に、中山大学の非物質文化遺産研究の状況、さらには中国の他の組織における状況も調べて教えてくれないかとお願ひすると、11年1月末にその返事のメールが届いた。それには添付資料があり、そこに中国非物質文化遺産網、中国芸術研究院およびその所属機構である中国非物質文化遺産保護中心のホームページアドレスが載っていた。それらは以下のとおりである。興味のある方は開いてみてほしい。

中国非物質文化遺産網 <http://www.ihchina.cn/main.jsp>

中国芸術研究院 <http://www.zgysyzy.org.cn/main.jsp>

中国非物質文化遺産保護中心 <http://www.zgysyzy.org.cn/newart/ihchina.jsp>

さて、李莉微さんから情報を得た後で、神奈川大学図書館で『新華文摘』2010年23期に、非物質文化遺産研究に関わる3篇の文章が載っているのに気づいた。それらは、王文章「増強“非遺”保護的文化自覚」（原載は『中国社会科学報』10年9月14日）、田青「中国非物質文化遺産保護的現状与

未来」(原載は『解放日報』10年9月26日)、余悦「非物質文化遺産研究的十年回顧与理性思考」(原載は『江西社会科学』10年9期)であるが、ここでは研究という側面から論じている余悦氏の文を拾い読みして紹介する。

余悦氏によると、2001年が非物質文化遺産保護にとっての画期となる年で、この年ユネスコが最初の「人類口頭及び非物質文化遺産の代表作」(中国語を文字通りに訳すところなる。日本語では、「人類口伝及び無形遺産傑作」と表現されている。)として19項目を選んだ際に、中国の昆曲が選ばれたことが一つの刺激になり、これ以後「非物質文化遺産」の存在が人びとと学界の視界に入った。そして、その保護の仕事が政府の強力な推進の下で素早く取り組まれることになったが、そこには学界の参与が不可欠であった。こうして、2002年5月に中央美術学院に「非物質文化遺産研究中心」が創立されたのを皮切りにして、中山大学、華東師範大学、華中師範大学等々が続々と同様の組織を作り、中央の役所である文化部に所属する組織としては「中国文化遺産研究院」ができ、さらに「中国非物質文化保護中心」「中国非物質文化遺産網」なども誕生した。これらの組織の目的は、非物質文化遺産の保護のために尽くすというもので、この目的を遂行するために多くの優れた学者が動員された。2001年1月から10年8月までに関連する文章が23000篇余り発表され、とくに07年から10年にかけては、毎年千の位に達する学術論文が書かれている……とのことである。

まさに国を挙げて無形文化遺産保護とその学術活動に取り組んでいる様相を感じ取れる文であるが、その雰囲気は李さんが紹介してくれた中国非物質文化遺産網のホームページを覗いても濃厚に感じ取れるのである。しかし、さらに中身を覗いてあれこれ論じる準備はなく、それは今後交流機関との関係を深め、論文も読んで具体的に彼らの興味の所在をつかむことで、中国の研究から学ぶべき点は何か、どんなネットワークを目指すべきかを考えていきたいと思う。